

東京薬科大学新聞

発行所 東京薬科大学 新聞会
責任者 二川祐政

号外

座席指定制の

意義を問う

誰のための学生大会?

去る十二月二日(水)午後二時二十分より大講堂体育館において、平成四年度後期定期学生大会が開催された。予定の準備不足が原因で、予定の時刻から一時間近く遅れてしまった。しかし会場内では入場時に多少の混乱があったものの、学生大会は無事に終了した。

今回の学生大会は次の議題を中心に行われた。

- 一、平成五年度カリキュラム年間行事予定
- 二、部室棟内会議室の管理について
- 三、交通問題
- 一、駐車場の快適な利用方法について
- 二、平成五年度学部学生駐車場駐車許可証発行者の認定について
- 四、自治委員会

一、図書コーナーについて
二、規約改正に伴う自治会の活性化
三、規約改正案
四、新設実行委員会について

七、監査委員会について
一、一号議案から四号議案まで
二、五号議案と七号議案は挙手多数により、全ての議案が可決された。

学生大会は七号議案まで終わった時点で緊急動議に移った。議案書の早期発行を要望した意見も出たが、最も時間をさき、真剣な議論が展開されたのはやはり「座席指定制の問題」であった。

座席指定制はあらかじめ各部の部長には学生大会の前に知らされてあった。しかし部に所属していない学生、所属

していても当日までに連絡の行き届いていなかった学生はこの制度に驚いた。学生は当日入り口で受け取った出席表には座席番号が印刷されており、学生はそれに該当する座席に座るように指示されていた。しかしながらこの出席表の座席番号はあらかじめ知らずと誰かが記入した。このようにして座席指定制が実施された。これは何人かの学生が疑問をもった。議案書の内容よりも「座席指定制の意味」に疑問が集中したのである。

今までは自由席制であったので、後方の座席を取るために部活単位で座席を取ったり合戦が行われていた。また知人が近くにいるという気安さから誰かが絶えなかった。それを解消するため執行委員会で

は座席指定制を考え出し、今回初めて導入したのである。学生側の買入の内容は「前のように自由に席を選べるほうが、友人と相談ができて意見が言いやすかった。また今日は入場にも時間がかかってしまった。学生大会は学生全員のためのものだから、学生が意見を言いやすい環境をつくってほしい。執行・自治委員会だけに都合がいい環境づくではないいけないのだ。これは「座席指定制」だ。これに対して執行委員会は「今までのやりかただと学生がうるさくて、学生大会の進行の妨げになり連絡事項が徹底して伝わっていきなかつた。それでいい学生にとっても、執行・自治委員会にとってもいいことではない。それを解消するために、今回座席指定制を導入したのである。」と回答した。さらにこの意見に対しては「学生側から「それでは学生大会とは単に連絡事項を学生に伝えればそれでいいものなのだろうか。」という疑問が提示された。これに執行委員長は「今までは学生大会そのものがなかなか進行していきなかつた。」と回答した。そこで学生側から「座席指定制の議決を取りたい」という要望が出たが、執行は「この意見は受け取れない。当然、会場内は騒然となった。結局長い間議論したにもかかわらず、双方の意見は全く平行線をたどった。これは執行と、意見を言う権利を持つ学生自身の立場の違いによるのである。」

今日のような形の学生大会は、はっきり言って時間の無駄である。学生の意見が反映されていないからである。これは執行だけのせいだろうか。学生は執行委員会に頼りすぎていないだろうか。これは正常な自然が行われているとはいえない。つまり学生が責任を放棄している今の自治運営は、完全に破綻していると思うのである。今の学生連はあまりに執行委員会に全てを任せきりにし過ぎてはいないだろうか。自分達の自治に無関心過ぎないだろうか。我々は自分達のしないければならないことも執行に押しつけているのである(これは大先輩であり、学生(自治会員)は全ての権利を有しているが、それに伴う義務を負わなくてはならない。全て自分で決めて行動し、それに対して自分で責任をとならなければならないのである。これは当然のことである。自由とは本来そのあるべきものなのである。自由の意味をしつかり認識してほしい。学生大会は何のために開催されるのか。誰のためにあるのか。このままだと学生の決定権は形式上のもので過ぎなくなり、学生自治の体制自体が崩れてしまっている。それによって全ての内容が学校側に決定されてしまっている。誰の目にも明らかだろう。学生大会は有意義なものにするの無意味に終わらせよう。学生自身の取り組み方一つで決まってしまうのである。

学生大会 五つの問題点

先日の学生大会(以後、学大と省略)は今後の東薬生の自治や決定権等を考える上で非常に良いきっかけになったと思う。学大を特に何とも思わない人も大勢いるかもしれないが、ここでよく考えてみてほしい。なぜなら、我々学生の自由に関わってくるからである。

学大について考える上で、以下のことは必ず理解してほしい。まず自治委員会について。我々学生は全員が自治委員であり、各学級が自治委員が構成される。つまり自治委員会が我々学生の意志を反映する組織であるわけだ。次に執行委員会についてだが、これは自治会規約を見ると学大(体育・文化・学術部門の総称)と同好会の代表者より構成されていることがよく分かる。そして監査委員会を含めた以上三つの委員会によって学生大会は構成される。では今回の学大の問題点を過去の学大も含め、挙げてみる。

- 一、直前まで予告なしの指定制導入
- 二、議長への信任の議決を省略したこと
- 三、決議の際に賛成の拍手を二回要求したこと
- 四、学大議案書を事前に配布していないこと
- 五、出席表に所属クラブ名を記入させないこと
- 六、学大とは一体どんな場であるのかをもう一度考え直して

一、規約改正に伴う自治会の活性化
二、規約改正案
三、規約改正案
四、新設実行委員会について

七、監査委員会について
一、一号議案から四号議案まで
二、五号議案と七号議案は挙手多数により、全ての議案が可決された。

学生大会は七号議案まで終わった時点で緊急動議に移った。議案書の早期発行を要望した意見も出たが、最も時間をさき、真剣な議論が展開されたのはやはり「座席指定制の問題」であった。

座席指定制はあらかじめ各部の部長には学生大会の前に知らされてあった。しかし部に所属していない学生、所属

していても当日までに連絡の行き届いていなかった学生はこの制度に驚いた。学生は当日入り口で受け取った出席表には座席番号が印刷されており、学生はそれに該当する座席に座るように指示されていた。しかしながらこの出席表の座席番号はあらかじめ知らずと誰かが記入した。このようにして座席指定制が実施された。これは何人かの学生が疑問をもった。議案書の内容よりも「座席指定制の意味」に疑問が集中したのである。

今までは自由席制であったので、後方の座席を取るために部活単位で座席を取ったり合戦が行われていた。また知人が近くにいるという気安さから誰かが絶えなかった。それを解消するため執行委員会で

は座席指定制を考え出し、今回初めて導入したのである。学生側の買入の内容は「前のように自由に席を選べるほうが、友人と相談ができて意見が言いやすかった。また今日は入場にも時間がかかってしまった。学生大会は学生全員のためのものだから、学生が意見を言いやすい環境をつくってほしい。執行・自治委員会だけに都合がいい環境づくではないいけないのだ。これは「座席指定制」だ。これに対して執行委員会は「今までのやりかただと学生がうるさくて、学生大会の進行の妨げになり連絡事項が徹底して伝わっていきなかつた。それでいい学生にとっても、執行・自治委員会にとってもいいことではない。それを解消するために、今回座席指定制を導入したのである。」と回答した。さらにこの意見に対しては「学生側から「それでは学生大会とは単に連絡事項を学生に伝えればそれでいいものなのだろうか。」という疑問が提示された。これに執行委員長は「今までは学生大会そのものがなかなか進行していきなかつた。」と回答した。そこで学生側から「座席指定制の議決を取りたい」という要望が出たが、執行は「この意見は受け取れない。当然、会場内は騒然となった。結局長い間議論したにもかかわらず、双方の意見は全く平行線をたどった。これは執行と、意見を言う権利を持つ学生自身の立場の違いによるのである。」

今日のような形の学生大会は、はっきり言って時間の無駄である。学生の意見が反映されていないからである。これは執行だけのせいだろうか。学生は執行委員会に頼りすぎていないだろうか。これは正常な自然が行われているとはいえない。つまり学生が責任を放棄している今の自治運営は、完全に破綻していると思うのである。今の学生連はあまりに執行委員会に全てを任せきりにし過ぎてはいないだろうか。自分達の自治に無関心過ぎないだろうか。我々は自分達のしないければならないことも執行に押しつけているのである(これは大先輩であり、学生(自治会員)は全ての権利を有しているが、それに伴う義務を負わなくてはならない。全て自分で決めて行動し、それに対して自分で責任をとならなければならないのである。これは当然のことである。自由とは本来そのあるべきものなのである。自由の意味をしつかり認識してほしい。学生大会は何のために開催されるのか。誰のためにあるのか。このままだと学生の決定権は形式上のもので過ぎなくなり、学生自治の体制自体が崩れてしまっている。それによって全ての内容が学校側に決定されてしまっている。誰の目にも明らかだろう。学生大会は有意義なものにするの無意味に終わらせよう。学生自身の取り組み方一つで決まってしまうのである。

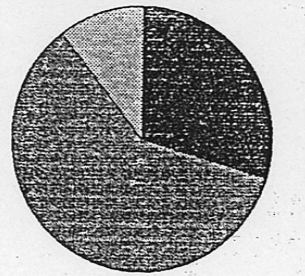
あなたは座席指定制に賛成ですか?

賛成	反対
全体 29.6%	全体 70.4%
一年生 27.8%	一年生 72.2%
二年生 37.8%	二年生 62.2%
三年生 26.8%	三年生 73.2%
四年生 59.8%	四年生 40.2%
五年生 62.7%	五年生 37.3%
六年生 60.0%	六年生 40.0%
七年生 8.5%	七年生 91.5%
八年生 9.6%	八年生 90.4%
九年生 13.8%	九年生 86.2%

この結果を考察すると「反対」が多数を占めている。しかし方次第では賛成は「番号の並べ替え」を要する「賛成」と「途中」で席を変えなければ「賛成」といった意見も含まれている。

で、学生は座席指定制の廃止を望んでいる、と簡単に言い切ることはできないだろう。賛成、反対ともに様々な意見が寄せられたが、今回のアンケートで特に目立った意見があった。それは「どちらでもない」という意見である。YES/NOに丸をつけながら、理由を書いても消極的な意見にとどまったものが多い。これは、学生はまだ判断に戸惑っているという印象を受ける。

今回のアンケートには指定制に対する意見のみならず、学生大会自体にまで及んだ意見も見受けられた。新聞会では、今回の様々な意見は非常に価値があると考え、アンケート特集号を企画している。自分以外の学生の意見を知りたい機会になると思われるので期待してしてほしい。



YES
NO
どちらでもない